

承德派遣を振り返って

諫山 倫果（大学1年）

この承德派遣は、私にとってとても大きな衝撃を与えてくれた。今回は、中国人の人柄、労働環境、食文化の3点に注目して述べていきたいと思う。

まず、中国人の人柄についてである。承德派遣前は、中国人は気が強くて少し怖いイメージがあった。しかし、その印象は到着後すぐに打ち破られ、おもてなし精神が高く、フレンドリーな人たちであり、さらに真面目な時と楽しむ時のギャップが強いことを知った。まず空港では、通訳の方や人民政府の方が迎えに来てくださり、優しくそして温かく迎え入れてくださった。その後も、食事を通して沢山のコミュニケーションを行い、常に気にかけてくださったことで私達はとても安心して生活することができた。私がこの派遣で1番深く関わった中国人は、ホストファミリーである。ホストファミリーは、私を本当の娘かのように接してくれ、たくさんの質問とご馳走で迎え入れてくれた。お土産もお昼ご飯も交通費も、嫌な顔一つせず出してくれるなど、常に「最高のおもてなし」をしてくださった。さらに、タクシーの運転手さんや飲食店の店員さんなど、日本ではあまり親しく話すことがない立場の方も、とてもフレンドリーに話しかけてきてくれた。また、衝撃が強かったのが、中国人の真面目な時と楽しむ時の切り替えである。高校見学では、朝早くから夜遅くまで勉強に励み、休みも月に2回だけという生活状況を知り、勉学に対してとても厳しい環境であると感じた。しかし送別パーティーなどでは、学校の厳しさからは想像もできないほど、騒ぎながら楽しく食事をしている姿にとっても驚いたとともに、そのように切り替えをしっかりと行なっていることに対して尊敬の念も抱いた。

次に、労働環境から見た経済力である。承德一中の先生に聞いたところ、休みは年に数回しかないそうだ。私が1番に感じたことは、「1人1人がこれほど働き、それに加えて14億人もの人がいるのならば、経済的な急成長を遂げることは当たり前だ」と痛感した。今回は知ることができなかったが、なぜ少ない休暇で働き続けることができるのか、実際の幸福度の数値はどのくらいなのかなど、興味深い疑問が多く出てきた。今後は、そのような疑問を掘り下げていきたいと思う。

最後が、中国の食文化である。中国では常に大量の食事で歓迎してもらった。常に満腹の状態がとても幸せであった。日本とは違う食文化も存在し、その内の一つが食事を残すことが良いこととされていることだ。食べきってしまうと「まだ足りない」と解釈され、また新しいものを出してくれるのである。この慣習は、好みの味だと「残さずに食べきってしまいたい」と少し残念に思うこともあれば、本当に食べきれない時は「残す慣習があるから！」と罪悪感を少し和らげてくれる2面性を持つ、私にとってとても良い慣習であった。

もう一つ大きな違いとして、朝食を家ではなく外に食べに行くということである。私のホストファミリーは、毎朝外食をしているそうだ。日本では、ほとんど無いことであるため少し驚いたが、朝ご飯の準備の手間を省くことができ、より効率的で快適な生活ができそうであると感じた。

今回は、中国人の人柄、労働環境、食分化の3点について述べたが、ここには書き切ることができないほど多くの衝撃を受けた。現在は、こんなにも近い国であるのに、知らないことが多くあり、共通点も相違点も存在する中国の奥深さにとても魅力を感じている。今後は、今回得た疑問を掘り下げ、中国語を学ぶなどのアクションを起こしていきたいと感じている。

今回の承德派遣に関わってくださった全ての皆様に、感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

